企業の環境・SRへの取り組み　VOL.4　新明和工業株式会社

本社:
〒665-8550
兵庫県宝塚市新明和町1-1
TEL:(0798)56-5000(代表)／FAX:(0798)56-5001

当社の前身は大正7年設立の「川西航空機㈱」です。「新明和工業㈱」となったのが昭和24年で、昨年創立60周年を迎えました。創業以来の「航空機」をはじめ、「特装車」「産業機器」など幅広い分野で社会や産業を支える多彩な製品/サービスを提供しています。

環境への取り組みを始めたのは昭和40年代で、平成11年迄に全工場でISO14001認証取得を完了、その後も本社や営業所などの非製造部門やグループ会社でも認証取得を進めるなど、全社挙げての活動に拡がっています。

活動内容は、敷地での環境負荷低減(公害防止、省エネルギー、廃棄物削減)に加え、企業本来の使命である環境に配慮した「より良い製品やサービスを社会に提供することでの環境貢献」にも注力しています。

LEAFさんの活動に賛同して企業PJに参画している当社"西宮・宝塚地区"は、阪神競馬場の東隣に在り、本社、開発センターの他、真空装置/自動電線処理機などを生産する宝塚工場、ごみ中継施設など環境保全製品を扱う環境システム事業部とグループ会社が共存しています。

私達の取り組みが参考になればとの思いから、宝塚工場を「兵庫県　環境学習施設」に登録し、一般の方々に"環境改善事例"のご紹介を行っています。

ご参考:
①当社の環境の取り組み(ECO-REPORT)をＨＰでご紹介
⇒http://www.shinmaywa.co.jp/eco/index.htm
②宝塚工場 環境施設見学のお申込み
⇒新明和工業㈱ 産機システム事業部 総務部 0798-51-1234迄

左:《特装車》外部電源からの充電が不要の電動式塵芥車(ごみ収集車)
右:《産業機器》高効率・高通過性水中ポンプ「CNWｼﾘｰｽﾞ」
平成21年1月「日本機械工業連合会会長賞」受賞

理事のショートコラム　VOL. 26

語り部セミナー

LEAF理事のコーナー

西宮高齢者事業団　代表理事　竹下　宗一

LEAFでは、西宮市の歴史・自然・文化を学び防災の面からも環境を捉えながら私たちの「まち」を考えることを目的とした語り部セミナーを実施しています。平成22年1月12日武庫川大学の甲子園会館で語り部倶楽部のメンバーや市民参加のもとに、武庫川女子大学三宅正弘准教授から「食の都・西宮と甲子園ホテル」のテーマでお話を伺いました。(写真:表紙)

昭和5年に建築された旧甲子園ホテルの歴史からのお話が始まると思っていたら、「私は毎日ケーキを食べています。それをノートにスケッチをしています。食べると太ると思われるでしょう。ですから三宮で食べて、その勢いで王子公園まで歩いて、また食べて御影まで歩いて、また食べて芦屋・西宮まで」と驚きの自己紹介からのスタートでした。

街が出来るとケーキ屋さんが出来る。ケーキ屋さんは街を考え、気づかしてくれる、コミュニティの基になっている。例えば、甲陽園のあるケーキ屋さんは店や工房などを分散し、1箇所に集中せずに職人さんが動くことによりまちが動くことを考えているということです。

西宮には食文化があります。昭和5年に「西洋料理」の食を中心にすえたホテルとして甲子園ホテルが出来上がりました。その少し前の昭和2年に甲陽園に「和食」のテーマパーク播半が完成し、それぞれが関西の迎賓館としての役割をはたしていました。同時期に西宮には「和洋」のもてなす空間があったのです。甲子園ホテルでは4階の和室で京都から肉だけでなく職人さんも呼んでスキヤキを出していました。物を作るだけでなく、消費することにより文化が蓄積され、都になっていくということを話されました。播半もなくなり、このホテルの厨房もなくなったのは残念なことです。

三宅氏は大学のある鳴尾の土地で楽しい事に取り組む活動をされています。鳴尾イチゴの復活に取り組まれているのです。1箇所で作った苗を配り、100箇所に広がりつつあるということです。また、えびす神社の門前町と酒蔵地帯、港町の地域を三色団子としてイメージした街づくり、南北軸を強化し伝統行事を再評価するなど、食をイメージしたユニークな街づくり提案をされています。

最後に六甲山系の山の緑と岩の色が、街の色になっていること。花崗岩のピンクの色が街の色をつくっており、街中の石垣に「桜が咲いている。」関東では黒い地面がここでは明るく、白い色であり、この地元の色をどうしたら残せるのかの活動を続けて行きたいと締めくくられました。

講演の中で、西宮の小学生はみんな甲山のことを知っていると話されました。甲山と言えば、すぐにリーフの副代表で語り部のまとめ役だった近藤浩文先生の「魅惑の山」＝３０９ｍの話が頭の中を駆け巡り、先生がいつも笑顔で話されておられたことを思い浮かべました。

近藤先生が話された意味を踏まえ、「西宮市の自然環境がどのように守られたのか、甲山や香櫨園浜・甲子園浜など過去の先人たちの取り組み・今の自然が確保され、次の世代にどう引き継ぐべきなのか」を、語り部のメンバーとともに考え、一人でも多くの市民に語り次ぎたい気持ちが沸き起こったセミナーでした。

その後甲子園ホテルのシンボルマーク打出の小槌などやホールを案内していただき2時間半の楽しい語り部セミナーを終えました。

なお、このセミナーは環境学習都市パートナーシッププログラムに参加されたグンゼラブアース倶楽部の支援を受けて事業化したものです。

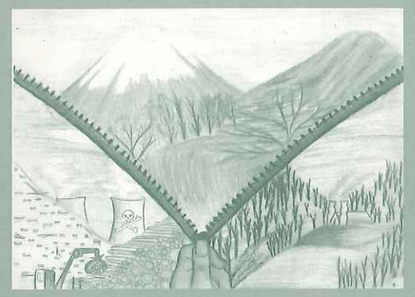
★★会員募集★★

当協会の活動は、個人や団体会員の方々のご支援によって支えられています。子ども達の環境活動を今後も支えていくために、随時会員を募集しています。
会員になっていただいた方には、環境研修会へのご案内や、情報誌等の資料をお送りします。

環境活動支援情報誌　りいふ　VOL.32　2010年 Spring
編集・発行　NPO法人こども環境活動支援協会（LEAF）
〒662-0832　兵庫県西宮市甲風園1丁目8-1
ゆとり生活館アミ1階
TEL　0798-69-1185
FAX　0798-69-1186
URL　http://leaf.or.jp
E-MAIL kodomo@leaf.or.jp

環境活動支援情報誌　VOL.32

りいふ



チリからの作品：
高校生の作品「真実の世界を覗く」

パキスタンからの作品：
ジャム瓶のふた、古布などを利用した作品

ベトナムからのレポート：環境ファッションショー

タイからのレポート：CYDA（子どもと青年育成協会）
Children and Youth Development Association

語り部セミナー：武庫川女子大学甲子園会館
旧甲子園ホテルバンケットルーム

テーマ：国際的視点から人材育成を考える

もくじ

環境パネル展／ 世界の子どもたちの環境活動から学ぶ　・・・・・・・1
パキスタン　・・・・・・・・・2
フィリピン・ベラルーシ・タイ・アメリカ　・・・・・・・・・3
ベトナム・ネパール・チリ　・・・・・・・・・5
中国・モンゴル　・・・・・・・・・7
アジアの女性リーダー育成／　・・・・・・・9
神戸女学院大学　寺嶋　正明（神戸女学院大学人間科学部環境・バイオサイエンス教授）
企業の環境・SRへの取り組み　新明和工業株式会社　・・・・・11
理事のショートコラム

未来が変える。日本が変える。チャレンジ25

2010 Spring
Learning and Ecological Activities Foundation for children

世界の子どもたちの環境活動から学ぶ

当協会では、設立当初より「世界の子どもたちの環境活動の交流事業」を活動の柱の一つとして様々な取り組みを行ってきました。

この活動の原点となっているのは、西宮市が1992年に始めた「2001年・地球ウォッチングクラブ（EWC）・にしのみや」の活動です。「地球ウォッチング」という取り組みを「地域」と「暮らし」を振り返る（見直す）活動として位置付け、10年後を目指して、世界の各地域でこの活動が行われれば、草の根活動で地球環境の保全ができるのではないかという思いが込められていました。また、「地球ウォッチング」を「国際交流の旗印に」という考え方の下、世界の各地域で行われている子どもたちの環境活動とのつながりを作ろうと、毎年3月に行われる活動発表の場である「EWC環境パネル展」に海外からも作品を募集しました。

1998年に当協会が西宮市からこのEWC事業を受託し、海外からの作品募集をさらに本格化させました。2001年度にはEWC10周年とも関連付けて「環境省アジア太平洋こどもエコクラブ会議」が西宮市で開催され、その企画運営を担い、また2002年には世界の子どもたちの環境活動をホームページで紹介する「地球キッズネットワーク」を立ち上げるなど海外とのつながりを強化してきました。その後も、EWC環境パネル展への作品募集を継続し、毎年、20ヵ国前後から活動をまとめた作品や絵画などが送られています。

本号では、2009年度のEWC環境パネル展に出展された海外作品についてご紹介します。今回の応募作品の特徴は、当協会が事業受託しているJICA（独立行政法人国際協力機構）の各種事業（チリ、モンゴル）や日米中ESDプロジェクトなどでつながりができた自治体や学校から作品が送られてきたことが挙げられます。

また、パキスタン・イスラム共和国から多くの作品が送られてきたことから、この作品を在大阪パキスタン・イスラム共和国領事館に紹介したところ、子どもたちの作品を領事館や大使館でも展示していただけることになり、領事から出展者に感謝状も出していただくことになるなどこれまでになかったような新たな展開も生まれました。

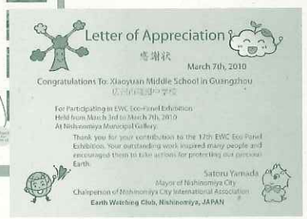
海外から送られてきた英語の作品の翻訳についてボランティアの方々にお世話になり、中国からの作品については西宮市役所環境都市推進グループの福島氏に翻訳していただくなど多くの方々のご協力をいただいたことにより、広く市民の方々にも内容を理解していただくことができました。ボランティアの皆さんには心よりお礼申し上げます。

環境パネル展の会場では、来場者の方々に海外作品への感想やコメントをいただくようにしており、これをまた翻訳し、感謝状とともに出展者に送り返しています。
こうしたことを通じて、少しでも環境活動を通じた国際交流が進むことを願っています。

↑　世界の子どもたちの環境活動をホームページで紹介する「地球キッズネットワーク」

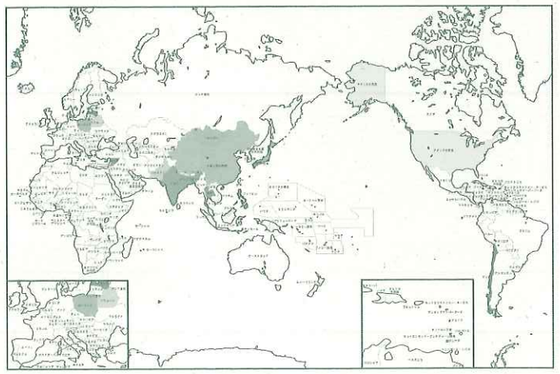
2009年度作品出展国・作品数

ベラルーシ共和国	1
ラトビア共和国	8
ポーランド共和国	17
シリア・アラブ共和国	14
パキスタン・イスラム共和国	216
中華人民共和国	48
モンゴル国	22
ネパール連邦民主共和国	2
インド	1
バングラデシュ人民共和国	1
ベトナム	1
タイ王国	1
マレーシア	1
シンガポール共和国	2
フィリピン共和国	1
アメリカ合衆国	1
チリ	20



←海外からの作品出展者には、会場での展示風景を写したEWCオリジナルカレンダーと西宮市国際交流協会から感謝状を送り、次年度への出展を案内しています。

今年度は、17カ国から約350点の作品が届きました。絵画や立体アート作品をはじめ活動レポートなど、最近は電子メールで送られてくるものが増えてきています。



海外の作品へのメッセージ

●中国の作品に

・ぼくも世界が平和になればいいなと思います。ぼくと同じ思いだね。
・自分も破壊はだめだし、みんなに「だめだ」と呼びかけるのがいいと思います。また、これからも活動を続けてください。

●シリアの作品に

家と同じぐらい道路をきれいにするなんてすごいですね。わたしも夏休みにごみを拾ったけど、なかなかきれいになりませんでした。

●ラトビア共和国の作品に

11歳でこんなにうまい絵が描けるなんて、びっくりしました。車の排気ガスの近くには、島がいるので、排気ガスを減らそうということを思いました。

学校全体での取り組みがうかがえる パキスタン

2008年度、幼稚園から高校まで7校からの応募がありました。2009年度も引き続きアル・ハディ・アカデミー、シティ幼稚園、B.V.Sパルシ高等学校、P.E.C.H.S女子学校のほか幼稚園、小学校が加わり、全作品点数が216点というたくさんの絵画やクラフト作品が送られてきました。

これらの作品を在大阪パキスタン・イスラム共和国領事館に紹介したところ、活動に関心を持たれ、多方面での展示を考慮いただけることとなりました。

Consulate of Pakistan
Osaka 559-0034

Tel: 06-6569-3300
Fax: 06-6569-3107
E-mail: pakkanshi@kansai.or.jp

1st April 1, 2010

I was pleased to know that your institution participated in EWC Eco Panel Exhibition. I appreciate the efforts made by your school and the children in contributing toward the Mission of Learning and Ecological Activities Foundation for Children (LEAF).

I hope this will continue in the future to have a better understanding of the challenges posed to the environment and to exchange of ideas at the international level especially learning from the Japanese organizations who are doing a lot to make the earth cleaner and better place to live.

Sincerely Yours,

Dr. Iqbal Thaheem
Consul

領事館から出展校への感謝状

貴校がEWCエコパネル展に出展されたことを嬉しく思います。こども環境活動支援協会（LEAF）の趣旨に添って教師と生徒たちが活動をされたことを称賛します。

この取り組みが今後も続き、環境課題のさらなる理解、国際レベルでの意見交換が行われ、特に地球をよりきれいに、より住みよい場所にするために多大な努力をされている日本の団体から学びの機会を得られることを願います。

在大阪パキスタン・イスラム共和国領事館領事
ムハマド・イクバル・タヒーン

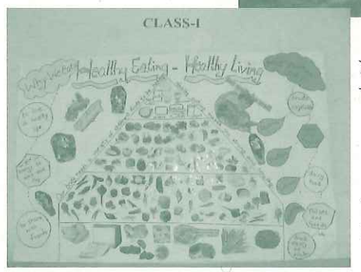
↑2008年も行われたアル・ハディ・アカデミーでの作品展の様子

B.V.Sパルシ高等学校

地球温暖化の問題は、未来を担う世代の意識を喚起すること、つまり環境問題に起因する破壊からどのように地球を救えばよいか考えを促すことに関心が向けられるようになっています。本校の生徒達は環境問題に深い関心を持っており、教師の指導のもと「B.V.S.環境を守ろう」という名前の活動を二年間行ってきました。この一年の生徒たちの活動を映像に収めました。

1）題名：「B.V.S.環境を守ろう」
　時間：7分23秒
　内容：本校の生徒が地球温暖化や環境問題について、校内でどのような活動を行っているか、社会に貢献しているかを紹介している。

2）地元カラチの環境について描いた絵画25作品
　地球温暖化や環境問題に対しての我々の関心度合いは、9歳から13歳までの子供たちの作品を見て頂ければ判ると思います。



←2009年作品
食物についての作品

アル・ハディ・アカデミー

私たちは、海がどのように汚染されるのか、どうやって酸性雨ができるのか、なぜ酸性雨がとても危険なのか、生徒たちに調べるように言いました。生徒たちは、様々な本を調べ、クラスで議論して知識を共有し、与えられたテーマの模型や絵を作り展示しました。また、環境や水の循環、汚染についての表を作成しました。
2010年1月９日に校内で行なわれた保護者･教師懇談会で展示した作品の写真をお送りします。

2009年、学内で行なった作品展
プロジェクト名：「爽やかな生活のための美しい環境」
年齢：　７才～９才
プロジェクトの目的：
・自然や美しい環境の大切さを学ぶ
・小さな活動で自然を大切にする
・グループ活動を通じて連帯感を学ぶ
・不用なものを使えるものにする

海外の作品へのメッセージ

●パキスタンの作品に

・パキスタンのみんなの作品は絵や写真でまとめたのがいいまとめ方だと思いました。とくに「健康な食生活」の絵がとっても上手でした。これからも地球を守ってください。
・ジャムのふたで金メダルを作るのはとてもすごいアイデアだね。きれいですごかったよ。これからもいろいろリサイクルしてください。

個人の活動から伝える
フィリピン

蛍（ホタル）　　レイ・アンソニー・オストリア（ビコール大学　17歳）

真夜中に目が覚めて家の外に何百万ものホタルを見たら、きっと信じられるだろう――あなたは知るだろう――僕たちにはまだ時間があることを……僕たちはまだこの戦いに勝てるかもしれない、ということを。

気候変動とは僕たちに勝ち目のない戦いだ、と僕は考えている。それはあまりにも悲観的な考えだ。やるべきことをやらずに、もう僕たちには打つ手がないと思うのは、情けない。僕はいつも自分に問いかける。実際に地球を救う活動を何もしないで、なぜそんなことを言うのか、と。

ホタル…

ホタルは、僕たちがまだ、空気が汚染されていない世界に生きていることを信じさせてくれる。若者が、彼らの親の世代が体を洗った川で、いまも泳ぐことができるのだ、と信じさせてくれる。

ホタルがたくさん生息しているところは空気がきれいだ、と言われている。僕は、家の外にホタルを見つけた時、自分の住む地域はきれいなのだ、と誇りに思った。皆の努力のおかげだ、僕は自分にそう言った。

そして、近所の人々がしている活動を、僕は知るようになった。

僕はいま大学1年生で、家から車で45分のところにある街で勉強している。この街の人々はみな、空気をきれいにするために最善の努力を払っている。政府は市全域を禁煙にする政策を導入した。もちろん、われわれは煙から逃れることはできない。ジープニー（訳者注：フィリピンで使われている小型乗り合い自動車）や車はガソリンを使っており、煙を出す。しかし、政策のおかげで、少なくとも煙の量は減る。この街で、たばこを吸う人を見かけることはない。

NSTP（大学1年生対象の社会貢献プログラム）もまた、生態系のバンラス維持に大きな役割を果たしている。

大学1年生は2学期にキャンパスの外で活動を行う。活動とは、たとえば、それぞれのグループが選んだ場所の掃除など。

だから、もしあなたが気候変動との戦いで劣勢だと感じたら、あなたの家の庭を見てほしい。ホタルが見えたら、引き続き頑張って活動して。もし見えなかったら、やるべき行動を取ってみたらどうだろうか。

僕たちには、できるのだ！

Republic of the Philippines
DEPARTMENT OF EDUCATION
Region V (Bicol)
DIVISION OF CITY SCHOOLS
TABACO NATIONAL HIGH SCHOOL
Tabaco City
awards this
Certificate of Commendation
to
Rey Anthony D. Ostria
as Environmental Conservation Advocate
in recognition of his distinguished display of concern for nature exemplifying the ideal Tabaco National High School student.
Given at Tabaco National High School, Tabaco City this 1st day of April, 2009 during the Seaior and Recognition Day Program.
VIRGILIO T. NAVARRO
Secondary School Principal IV

昨年の第16回エコパネル展に出展したことで、その後の4月1日、環境保護提唱者として母校から表彰を受けました。

EWCさん、どうもありがとうございます。多くの若者たちを地球のための活動へと後押ししてくれて、ありがとうございます。

文化・歴史から伝える
ベラルーシ

子どもたちと人権教育のためのスモーガン情報センター

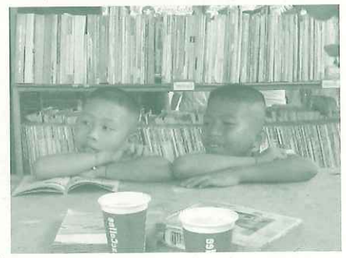
ベラルーシの「子ども達と人権教育のためのスモーガン情報センター」は、地元の学校の生徒たちと協力して、様々な活動をしてきました。冬には、鳥やすみかを失った動物を助け、春には私たちの住む場所をより良くするために木を植えます。この活動は、次の世代に教育的効果があります。なぜなら、次の世代は、どのように土地や国を大切にするか、私たちから学ぶことができるからです。チェルノブイリの災害によって、私たちの国土の30％以上が放射能によって汚染され、森や土は今もなお、ひどく汚染されています。これは、とても深刻な問題です。

私たちはこのほかにも、生徒たちと共に、画期的な活動にも取り組んでいます。ダンスコンテストや、私たちの先祖がポーランド軍やリトアニア軍、ロシア軍と戦っていた時代にささげる歴史的な行事のお手伝いをしています。ホロコーストが行われた第二次世界大戦から生還した退役軍人のお祝いをします。私たちの次の世代も、この歴史を忘れてはいけません。また私たちは、少数派の文化を伝えていこうとしています。特にジプシーの人々は、いまもなお、ヨーロッパで苦しんでいますが、彼らは音楽やダンスの才能にあふれています。森を美しくするために孤児と共に森へ行き、たき火で料理し、将来について語り合ったりもしました。

私たちは、日本の生徒や教師が自然とバランスを保ちながら暮らし、世界で援助を必要としている子どもたちに寛大で友好的であり、心から応援してほしいと願います。

地域活動から伝える
タイ

CYDA（子どもと青年育成協会）



CYDA（子どもと青年育成協会　Children and Youth Development　Association）は、1997年に設立された非政府組織（NGO）です。CYDAはタイのチェンマイ地方に拠点を置き、1998年7月にタイ政府に正式に認可された団体です。CYDAは子どもや青年により高い教育、農業や生物や自然、環境保護についての知識を得る機会を与え、タイの伝統文化を継承することを目的にしています。

生物多様性は重要な地球資源であり、保全されるべきものです。環境保護は未来を確保するために必要であり、環境保護とは自然や農村風景を守ることです。CYDAは、色々な方法で環境保護の活動を行っています。汚染物質の排出が増加するなか、地域に住むより多くの人が保護活動に参加することが大切です。当団体は、環境保護に向けて情報提供や多様な活動を推進しています。

子どもの家

CYDAは、貧困家庭や壊れた家庭の、特に山岳民族出身の子どもや青年たちが暮らす中間施設を持っています。生物多様性を保ち、温室効果ガスの排出を減らすために、彼らは自然農法に取り組んでいます。化学系の殺虫剤を使わず、有機肥料を使い、野菜を栽培します。収穫した野菜は大部分を自分たちの食料として消費し、残りは通常、市場で販売します。青少年たちは、環境保護や環境に優しい農業について学んでいます。

学習を支援し、子どもの社会奉仕活動を支援

CYDAは、地域の子供たちが環境について調べられるよう、図書コーナーを設けています。地域の子供たちを集めてキャンプをし、環境についての知識を深めてもらいます。参加者はゲームやワークショップを通じて学びます。またCYDAは、地球温暖化の防止を主目的としたキャンペーンを展開しています。地域に住む約50人の子どもたちが参加しました。キャンペーンの前には、テーマについて学び、温室効果ガスの排出増加は環境に悪い影響を与えることを学びました。子どもたちは、テーマを視覚化するために、ポスターや自転車、緑の旗や帽子を利用しました。村を自転車で回り、資料を配布し、説明しました。

環境とエネルギー保全プロジェクト

CYDAは、環境に配慮した農業、かまど、森林保護、ごみの分別を行う独自の環境とエネルギー保全プロジェクトを行っています。環境汚染を防ぐため、CYDAは地域住民にかまどの使用を奨めており、より多くの家庭でかまどを使用してもらいたいと考えています。木から作った炭は調理に使われます。燃やす時に出た二酸化炭素には、殺虫作用があります。また、灰を使って、シャンプーやその他の洗浄用製品を作ることができます。

森林の伐採は、生物多様性に深刻な問題を与えています。天然資源や生物多様性を守る一つの方法として、CYDAは野生生物、特に森を守ることの大切さを人々に啓発しています。

ごみの分別をすることで、次から次へと天然資源を使用するのを避けることができます。分別したものを工場に戻すと、新しい製品に生まれ変わります。このようにして資源は自然のサイクルの中で循環します。リサイクルを行うため、CYDAは地域住民に分別を奨め、よりよい環境を作り出すための知識を広めています。

CYDAは、地域とともに活動し、地域の人々と協力して、環境保護の必要性への理解を広めています。子どもたちに発表の機会を与えることは大切です。CYDAは子どもたちに知識や気づきを持ってもらい、環境保護について自分で考える力を養ってもらうことを願っています。結局のところ、子どもたちは未来の担い手ですから。

何か大きなことを成し遂げるには、力を尽くさなくてはなりません。誰もが変化を起こす力を持っているのです！

グループで活動する
アメリカ

バーモント州バーリントン市に住むデーナさんは、2006年には、友人と一緒に、スーパーで自分たちの作ったクッキーを売り、ケニアやタンザニアの熱帯雨林を守るために寄付する活動を報告してくれました。「EWCニュース」でその活動を紹介するなど交流を続けています。

「グリーン・アップ・デー」　　デーナ・ハートショーン（12歳）

バーモントでは、5月の最初の土曜日は、「グリーン・アップ・デー」という特別な日です。住民は、緑の袋を持って道を歩き、ごみを拾います。

日本の子どもたちも集まって、町をきれいにする日を設けてはどうでしょうか。みな、自分たちのできる方法で、地球をきれいにするべきだと思います。

左上：一緒に参加した4Hのメンバー
右上：日本についての展示物の前で
「4H（アメリカの青少年教育団体）メンバーが日本にグリーンアップを紹介します」
左下：汚いゴミ
左右：美しい景色とゴミ

海外からの支援を活用する
ベトナム

京都大学地球環境学堂がベトナムで行っているプロジェクトの論文がパネル展に報告されました。

プロジェクトで実施した、環境ルール冊子の作成、木の葉や不用品を使ったアート作品の作成、プロジェクトに参加している3つの中等学校との交流プログラム、居住地区での環境学習、環境新聞の作成、雨期に起きた事柄の記録、環境問題についてのスピーチ大会などの中から「環境ファッションショー」について紹介します。

レ・ティ・ヒエン・ニャン（フエ農林大学）
飯塚明子（京都大学地球環境学堂）

ベトナムでの環境教育の考え方の普及は、他の国よりも遅かったのですが、この10年でかなり浸透しました。いまや、程度の差こそあれ、環境教育は人々の生活に広く関わっています。特に学校では、環境教育はなくてはならないものです。……（略）……

フオン・フォン中等学校は、1975年のベトナム解放以前に設立された学校です。現在、教員数58名、生徒数911名です。学校のあるフオン・フォン村は、2つの大きな川（ボ川、フオン川）の河口に位置し、「水とごみの集積所」と言われています。学校も地域に住む生徒も、環境問題の影響を受けています。教師と生徒は環境問題について考え、数多くの環境保護活動を行ってきました。6年生から9年生までの地理や生物、社会などの教科のカリキュラムに、環境問題を組み込んでいます。さらに、どの教科であれ、環境に関係がある項目が出てきたら、教師は詳しく教えるようにしています。加えて、清掃活動や広報活動、植林、栽培などの課外活動を行っています。

2008年3月には、JICAの草の根プロジェクトの協力を得て、環境に関心を持つ生徒、教師とともに「グリーン・クリーン・美化クラブ」を結成しました。環境に対する思いを込めて名付けました。草の根プロジェクトには、ほかに2つの学校が参加しており、防災、環境教育の活動をしています。「グリーン・クリーン・美化クラブ」という名前は、たくさんの木に囲まれた緑の環境を創り、清掃活動を行い衛生的な環境に暮らし、最終的には美しい環境も楽しみたいという願いを表しています。

・環境ファッションショー

生徒の提案により、環境ファッションショーを開催しました。これは、古いものを再利用することによって、生徒の環境保護に対する意識を高めること、「グリーン・クリーン・美化クラブ」の活動を他の生徒たちや地域に住む人々に知ってもらい、環境保護の大切さを考えてもらうために行いました。

グリーン・クリーン・美化クラブの生徒は、やぶれたナイロンの袋や、枯れ葉、古新聞など要らなくなったものを使って、服を作りました。そして、グループごと

に、作品を披露しました。生徒は、家族や友人、近所に住む人に、ファッションショーのチケットを1000ベトナムドン（日本円で約5円）で販売しました。

ファッションショーは大成功でした。生徒は工夫して服を作り、環境問題について強い関心を示しました。とてもよく準備をしました。なによりも、生徒の親、教師、他の生徒たち、地域の人々など、たくさんの人が観客として参加してくれました。

結論

欠席する部員がいたり、活動に多くの時間がとられる、といった運営上の困難があるとしても、クラブの活動は学校の生徒全体に、また地域の人々に相応の影響を与えています。何よりも、部員が環境問題への関心を深め、環境保護を訴える中心的存在となっています。活動は地味なものですが、それらは生徒の発案によるもので、彼らの関心事を実行に移すことに重点を置いています。生徒は楽しんで活動し、積極的にかかわっています。これまでのところ、彼らの環境活動は、フオン・フォン校生徒、他の学校の生徒、地域のみならず、マスメディアにも好評を得ています。教師も生徒も環境計画を重要だと考えていますし、計画が現実のものとなることを望んでいます。

（論文より抜粋）

環境問題をアート作品に
チリ

チリ共和国第６州ナンカグア2009 環境アートコンクール

チリ第6州、ナンカグア市において、ナンカグア市役所、ナンカグア環境委員会主催で全校対象に2009年8月～10月まで環境をテーマとしたアートコンクールが開催されました。

このコンクールは、未来を担う子どもたちの創造力により、様々な環境問題を現実に抱える私たちの生活への問題提起を促す事を目的としています。

第1回のテーマはリサイクル工作と絵画。日常、使用後にごみ箱に捨ててしまっているペットボトルや乾電池、新聞紙などを再利用する事で、日常を彩る様々な作品を作る。子どもたちのアイディアは様々で、思わず唸ってしまうもの、目を引くものが沢山生まれ、実際どんな物がどんな風にリサイクルできるのか、考えるきっかけとなり、ごみを日常を見直す煌めきとして発信するコンクールとなりました。はじめての企画である事もあり、人々の関心も高く、コンクール終了後の展覧会も盛況で終わらす事ができました。

海外の作品へのメッセージ

チリの作品へ

- 新聞紙で絵を書くのは、とってもすごいし、エコでいいですね！
- とても絵が上手ですね。自然のないまちから自然のまちへかえたい気持ちがすごく伝わります。わたしは、絵に書いてある自然なまちでくらしたいです。
- みどりがよみがえっていくようなのがとてもよくかけているすてきな絵ですね。この絵を見た時、かんどうしました。
- 私はこの絵で今の世界の真実は、下のほうの物だと思いました。次々に木等がばっさいされていってるのを知っているからです。小さなことからでいいから、やってみようと思えました。
- 絵がとても上手でとってもわかりやすく、みやすいと思いました。絵を見たときに、木にも心があるということがわかりました。いっしょにエコ活動にとりくんでいきましょう！
- 伐採に苦しむ木たちがうったえてるようで、とめなければと、自然に思える作品でした。次は自分の番だと木が泣いているようにも思えました。
- わたしもエコをしているので、チリのみななんも、エコをがんばってください。わたしは、エコバッグやリサイクルをしています。みなさんも、エコバッグをもっていったりリサイクルをしてください！
おうえんをしています。わたしもがんばります。

都市化の問題を紹介する
ネパール

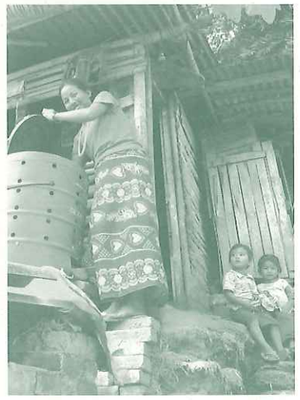
ヒルシャブ・バハッタライ　（ブダニルカンタ学校　15歳）

ネパールにおいては都市化が増えており、地方自治体のサービスに、特に増大する一方の廃棄物の量を管理することに大きな圧力をもたらすほどになっています。現在、地方自治体で発生する廃棄物の殆どは十分に管理されておらず、それによって、深刻な健康および環境の危険を、特にスラムや無断居住者の地域で発生させています。そこでは居住者たちはよりよいサービスのために代金を支払う余裕が更に無く、また、多くの場合、公的機関によって無視されます。そのために、貧しい都市の集落は、無差別な投棄と空地がないことによる影響を最も受けるのです。

いくつかの都市部では、地方自治体が効率的で費用効果のよい廃棄物管理のために革新的なアプローチを導入しようと、地域団体や民間業者と手を組んでいます。

これらには、カトマンズおよびその他のいくつかの地域における戸別収集システム、カトマンズおよびバクタプールにおけるたい肥化。ヘトウダやバクタプールといった地方自治体における地域団体と民間企業の参加を伴うプラスチック収集とリサイクリング・システムがあります。ヘトウダ地方自治体では、市内で発生した医療廃棄物を管理する簡単で効果的な方法を開発しました。ネパール西部の中規模の町であるトリプバンナガルでは、地域の努力によって埋立地が建設され、現在、地方自治体と民間セクターの積極的な関与のもとに、地域団体ベースのグループによって管理されています。今や課題はこれらの良い例を模倣し、拡大することです。

（レポートより抜粋）



たい肥化蓋付き容器を使用している女性

家庭たい肥化を推進するために、いくつかの地方自治体では奨励金つきの価格でいろいろな大きさのたい肥化蓋つき容器を売っています。蓋つき容器は魅力的で、軽量で、頑丈で１家庭の廃棄物を取り扱うには十分な容量を持つように設計されています。

蓋つき容器の内部は二つに分かれ、上が廃棄物用で下がたい肥用です。自然の空気混入を行わせるために、蓋つき容器は側面に穴があり、上下の間に棒ふるいがあります。

学校で取り組む

中国

LEAFでは、2008年度より、中国南東部広東省におけるESD推進に向け、中国華南師範大学を中心とした関係者及び米国バーモント州シェルバーン・ファームズ関係者とともに「米・中・日・ESD(持続可能な開発のための教育)プロジェクトを行っています。

2008度年には、お互いの国が中国、日本（西宮市）を訪問。2009年度は米国を訪問しました。この交流の中でパネル展出展への呼びかけを行い、中国からは２中学校、３小学校、48点の作品が届きました。

■中山市三角中学

中国ではプラスチック加工、金属加工、家具生産、服装の染色などによる汚染、排気、廃水と騒音などが問題となっています。中国中山市三角中学1年11組の生徒による作品は、生活排水・畜産養殖業の汚染を受けている地域の川の水質汚染を改善するためにクラスで「三角鎮の環境汚染状況調査　社会実践チーム」を作り1ヵ月調査した後、活動発表を行ったものです。環境パネル展には、詳細な活動方法や経過と生徒11人の報告が届きました。

＜水資源の保護は私から＞

■李敏芳

水は生命の源であり、人類の健康は水と切り離せません。何日か食べずに過ごすことはできますが、水を飲まずにはいられません。しかし現在、地球上には２０億人もの人々が、非常に水が欠乏した状況におかれています。不衛生な水を飲むことで、毎年、世界で５０００万人もの児童が命を落としています。この数字には心が痛みます。水の危機は、すでに人類への警鐘となっています。

中国の水資源は比較的豊富ですが、その分布には偏りがあります。東に多く西に少ない、南に多く北に少ない・・・水が欠乏している地域はたくさんあります。しかし、水が欠乏している地方でも、人々は水を無駄遣いし、水質汚濁は非常に深刻になっています。

今回、学校のみんなで水路の調査を行いました。下流の地域では、堤防はアリの巣だらけで、川の中にソファーが捨てられていたり、プラスチックの袋や灰皿が浮いていたりしました。水質は人間の活動で汚染され、いやな匂いが漂っていました。梁先生は私たちに、「水路は三角鎮の母なる川です。洪水を防ぐ能力が低かったり、土壌の流失が深刻だったり、水質汚濁が深刻だったりという問題が、この水路には存在します」と教えてくれました。私は、みんながごみを水路にポイ捨てすることがなければ、このようなことにならなかったはずだと考えました。

こんなこともありました。母が市場から買ってきた魚でスープを作ったところ、まったく美味しくないばかりか、強い石油のような匂いがしたのです。母は私に、これは汚染された魚かもしれない、中毒するかもしれないから食べないで、と言いました。ま

カラフルな色遣いの絵画作品

「炭素君漫遊記」
李嘉楹

た母は、工場の中には水資源に注意を払わないところもあって、工業廃水を川や湖に垂れ流して、重大な汚染を引き起こしているのだということを教えてくれました。魚介類がこのような水のなかで生活していると、だんだん中毒して死んでしまいます。人類もこのような水を飲んでいたら、健康に重大な影響を及ぼして病気になってしまうかもしれません。これを聞いて私は本当に怖くなりました。お金を稼ぐことばかりに躍起になって、水資源を保護しないままでいると、私たちはきれいな水を飲むことができなくなります。こんなことで、人類は生存していけるのでしょうか。

私は、「人類よ！川を醜い姿に変えないで！魚を毒薬に変えないで！水を守ろう！私たち生命のよりどころを守ろう！」と声を大にして呼び掛けたいです。

＜心ひとつに協力し、地球環境を守ろう＞

■温愛華

地球は私たちが住む場所。私たちにとって、とても大切な場所です。しかし、地球上の環境は汚れています。私たちは、がんばって環境を保護しなければいけません。

私はいままでに、地球のごみを増やすようなことをしてきました。たとえば、小さいころのことですが、外でケーキを食べたとき、ティッシュで口をぬぐった後、ポイ捨てしたことがありました。それを見て、父は「なぜそんなことをしたの？」と聞きました。「だめなの？」私が問い返すと、父は笑いながら「みんながポイ捨てしたら、このまちや地球の環境がめちゃくちゃになってしまう。ごみだらけの環境で、生きていけると思う？お父さんだったら、すぐにごみを拾いに戻って、ごみ箱に捨てるようにするけど、どう思う？」と言いました。私はそれを聞いて、紙くずを拾いに行き、ごみ箱に捨てました。お父さんは、「なんで、こんなふうにさせたか今は分からないかもしれないけど、大きくなったら、お父さんが話したことの意味が分かってくれると思うよ」と付け加えました。

いま、このことを思い返してみて、私がやったことは良くなかったと思います。みんながそんなことをしたら、ごみが山のようになってしまうから。私たちは、一人ひとりが身近な環境を大事にするだけでなく、まわりの人にも、みんなで取り組まなければ効果が上がらないことを知らせていく必要があります。美しいまちを作りたいなら、私たちは力を合わせて、みんなで地球の環境を守りましょう。地球の笑顔がいつまでも輝いて、地球の喜びが世界に満ち溢れ、そして、その地球の笑顔が、私たち一人ひとりの心のなかに輝くようにしていきましょう！

＜環境保護は学校教育から＞

■梁　文（三角中学指導教諭）

世界の各界の人々が積極的に環境保護活動に身を投じる昨今、学校も例外であるはずはなく、学校においては、環境保護が重点項目でなければなりません。……（略）……生徒を環境保護の活動に引きこめば、社会全体を環境保護活動に巻きこむことができるはずなのです。一人ひとりが環境保護に責任感を持つようになるはずなのです。これは心強い新戦力と言えるのではないでしょうか。

私は中学校の教師として、生徒に環境教育を行っています。生徒たちに地球を大事にし、資源を大切にし、環境を保護することを教えることは、とても重要で、その恩恵は遠い未来にまで及びます。学校は環境保護の中心となる場所であり、この場所の役割を十分に発揮して、生徒たちを積極的に環境活動に引き込んでいくことが必要です。

私たちの三角鎮は、今まさに、経済的社会的発展において大切な時期を迎えています。中山市の東部開発の戦略によって、三角鎮には発展のチャンスがもたらされています。新しい発展の基礎を作り、この地域の環境保護の取り組みを強化するために、持続可能な発展のための実験区の建設を推進しています。また、本年７月には、三角鎮は「広東環境保護専業鎮」を創設し、環境保護の理念でこの地域の経済・社会のすべてを率いていくことを決定しました。しかし、私たちの三角鎮の環境には、まだあまり策が講じられていません。内河涌は三角鎮の「母なる川」と言うべき存在ですが、さまざまな原因により、保護と整備があまり行われていません。区域内の河川は、生活排水と都市化による面的な水質汚濁の影響を受けています。また、農業では化学肥料や農薬の使用量が増加し、畜産養殖業の廃水が汚染され、工業に由来する廃水の急激な増加することにより、水質汚濁はかなり深刻になっています。生徒たちがこの区域の環境に興味を持ち、より深く理解し、環境保護意識を強め、「私たちから環境を保護する」という社会的責任感を育んでいくために、私はこのたびの「三角鎮の環境汚染状況調査」の総合実践活動を計画準備しました。

環境保護に関する知識を身につけ、環境保護に責任を持つ意識を芽生えさせてこそ、適切で実効性のある行動で環境を守ることができます。自分から始めるんだということを、生徒たちに教えるのです。現在の生徒たちは、両親に宝物のようにして育てられ、食べるものも着るものも十分で、学用品も良いものをたくさん持っています。そのためか、生徒たちは学用品をあまり大事に扱いません。ごみ箱のなかには、まだ使える鉛筆や消しゴム、ノートなどが捨てられています。学校で学用品の節約運動を行うことは、資源の節約と環境の保護になるだけでなく、生徒たちの心に節約の美徳を育むことになります。これは、一石二鳥の取り組みです。……（略）……

今回の社会実践活動を通じて、生徒たちの問題発見能力と問題分析能力が訓練されたのと同時に、人と交流して協力することを学びました。……（略）……

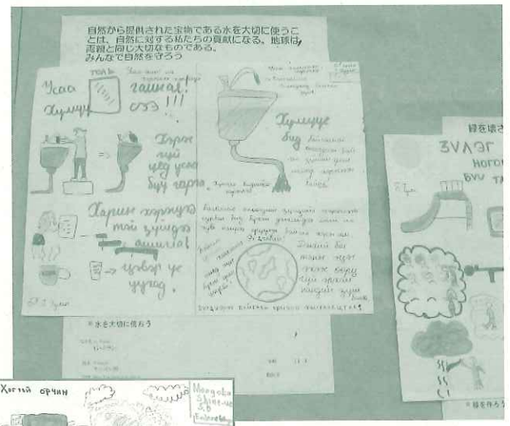
環境保護はみんなの責任です。私たちは学校を活動の中心として、生徒たちを環境保護の道に導き、ともに環境にやさしいまちを作り、ともに美しい未来を創っていきます。

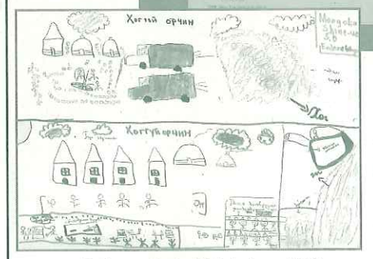
自然環境を守る

モンゴル

当協会事務局長がＪＩＣＡからの要請で、モンゴル国アルハンガイ県（中央部）ウギノール村にＪＩＣＡの支援で建設されたウギ湖湿原情報トレーニングセンターの管理運営面に関する職員研修や子どもたちへの環境教育に関する指導のためモンゴル国を訪問した際に、ウギノール村やウランバートル市の学校で環境教育のモデル授業を行いました。このことが契機となり、各学校で取り組んでいた環境活動の成果を環境パネル展に出展してくれました。

■ウランバートル市　新時代小学校





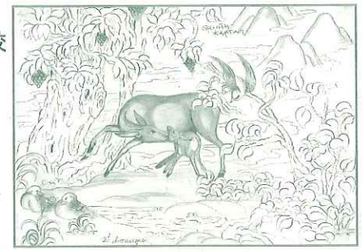
「水を大切に使おう」
↑　G・クラン（11歳）

自然から提供された宝物である水を大切に使うことは、自然に対する私たちの貢献になる。地球は両親と同じ大切なものである。
みんなで自然を守ろう。

「ごみのある環境とない環境」
↑　バトバヤスガラン　（11歳）

ごみのある環境には、遊ぶ場所もない。ごみをリサイクルしたり、埋めたりすると、ごみのない環境になり、生活が豊かになる。

■ウギノール村学校



「母の幸福」
アルタンゲレル
（9年生　15歳）

海外の作品へのメッセージ

モンゴルの作品に

- 今おこっているさばく化や洪水のことが上手くかかれていました。ぼくたちも、もっとエコなことをしたいです。
- とてもえがうまくてびっくりしました。ぼくもこんなえがかれるようになれるように努力します。

地域からESDを推進する女性環境リーダー

神戸女学院大学 人間科学部教授　寺嶋　正明

■プログラムの概要

神戸女学院大学大学院人間科学研究科では文部科学省科学技術振興調整費「戦略的環境リーダー育成拠点形成」事業による支援を受けて、平成21年度から5年間の予定で「地域からESDを推進する女性リーダー」という教育プログラムを開始しました。このプログラムの特色はアジア・アフリカ地域の大学院に学ぶ女子学生を研修生として受け入れ、1年間の研修を行い、帰国後にそれぞれの地域で活躍できる女性環境リーダーを育成することです。神戸女学院大学人間科学部では「りぃふ31号」で紹介したように、学部学生を対象に地域と連携して将来地域のために活躍できる人材育成を進めています。大学院人間科学研究科でも平成19年より、「環境と健康のために行動する女性科学者養成」、「地域実践活動を創造できる臨床心理士の養成」の2つの大学院教育プログラムを実施しています。いずれのプログラムも地域に根ざした活動ができる専門家を養成するものです。神戸女学院大学人間科学部における教育実績を基盤にして、アジア・アフリカ地域の大学院生を5年間で合計20名受け入れ、日本人の大学院生とともに、学ばせることを目標にしています。

図１　元智大学（台湾）からのライブ講義

図２　ミリアム大学（フィリピン）の学生たちと

■カリキュラムの概要

この教育プログラムには3つの柱があります。１つ目は本学の教員を中心にしたリレー式の英語による講義で、「日本における公害問題」と「日本でのESDの推進」の2科目を予定しています。講義の一部には文学研究科の協力を得て、日本語から英語への同時通訳も利用して行います。

2つ目はインターネットビデオ会議システムを利用したアジア諸国の教員によるライブ講義です。図１には台湾の元智大学と結んで行ったライブ講義の様子を示しました。先の講義と並行して、「アジアの環境とその保全Ⅰ」ではアジア諸国の環境汚染とその対策について、「アジアの環境とその保全Ⅱ」ではアジア諸国における自然環境とＥＳＤへの取組について講義します。中国、マレーシア、インドネシア、ベトナム、フィリピンから、生の講義を聴くことができます。

3つ目はNPO法人LEAFと連携したインターンシップです。アジアからの研修生は西宮市に根ざしたESDを推進するNPO法人LEAFの活動に直に触れることで、帰国後の活動のイメージすることができます。
その他にも、日本の世界自然遺産や自然保護の現場を訪ね、そこで活動する女性のボランティア、スタッフらとESDに関して意見交換を行うフィールドトリップや西宮市や連携する企業でのインターンシップを計画しています。

このプログラムの詳細についてはホームページ http://humangrad.kobe-c.ac.jp/ECO/index.html) をご覧ください。

■準備状況

この教育プログラムは2009年7月にスタートしたばかりで、大学内の規程の整備など2010年10月からアジア・アフリカ地域からの研修生受け入れるための準備をしています。実際にはアジア地域からの大学院生受け入れが主となりますので、2009年8月にはアジア諸国を回り、大学院生を対象にしたセミナーを行い、この教育プログラムへの参加を呼びかけました(図２)。梨花女子大学、徳成女子大学（韓国）、華南師範大学（中国）、プトラ大学（マレーシア）、サムラツランギ大学（インドネシア）、ダナン工科大学（ベトナム）、ミリアム大学、デ・ラ・サール大学（フィリピン）を訪問しました。

セミナーでは神戸女学院大学での西宮市、NPO法人LEAFと連携した実践的な人材教育の様子を説明し、大学院でのこれまでの教育実績とこのプログラムの概要を説明しました。発展途上にあるアジア地域では環境問題、教育問題、貧困問題、人権問題などに非常に多くの課題を抱えています。最新の科学技術を学ぶために日本に留学する制度はそれぞれの国にあるようですが、本プログラムのように地域に根ざしたESDを日本で学ぶ機会は極めて限られていますので、非常に高い関心を持ってもらえたようです。地域が抱える課題を解決するためには、「最新の科学技術」ではなく「地域で活動する人々の方法論」を学ぶことが重要であるとの認識ではすぐに一致することができました。

現在はプログラムへ受け入れる大学院生の選考中ですが、うれしいことに10名を超える大学院生が応募してくれました。環境科学、都市公園の設計、都市のゴミ問題、子供たちの自然観とESD、消費者保護の法整備など様々な課題にいろいろな立場から取り組む女子大学院生たちが手を挙げています。当初の予定では5名の受け入れでしたが、外部からの奨学金が獲得できれば、できるだけ沢山の大学院生を受け入れたいと準備を進めています。

研修プログラムの年間計画

9月	オリエンテーション
10月	秋学期
11月	①講義：日本における公害問題（2単位） ②インターネットを使ったライブ講義 アジアの環境汚染（2単位）
12月	③インターンシップ（秋学期）（4単位）
1月	春休み
2月	④フィールドワーク（2単位） 日本の世界自然遺産（屋久島、白神山地など）を訪ねる。ボランティアやNPOスタッフとして働く女性と意見交換。
3月	
4月	春学期
5月	①講義：日本でのESDの推進（2単位） ②インターネットを使ったライブ講義 アジアでのESDの推進（２単位）
6月	③インターンシップ（春学期）（4単位）
7月	夏休み
8月	⑤2週間のインターンシップ（2単位） 西宮市役所や連携する企業でのインターンシップ

■今後の展開

現在は大学院生の受け入れ、カリキュラムの詳細の決定と講義の準備、アジア地域の大学教員との連携などの準備に追われています。10月にはアジア諸国からの大学院生が神戸女学院に集まり、NPO法人LEAFを通じて、西宮の方々と一緒に学べるようになることを願っております。この教育プログラムに関心を持っていただいた方、ご協力いただける方のからのご連絡をお待ちしております。また、このようなアジア地域の大学院生と一緒に大学院で学んでみませんか？神戸女学院大学大学院人間科学研究科では社会人を対象にした入試も行っています。年齢に関係なく、学んでいただくことができます。ご関心のある方はご連絡ください。

連絡先は〒662-8505西宮市岡田山４－１
神戸女学院大学大学院　人間科学研究科
E-mail: eco_leader@mail.kobe-c.ac.jp